【優秀賞】

【水と生きる】

名古屋市立御田中学校　二年　　吉田　帆花

「地球は青かった」―世界で初めて、生まれついた地をはなれ、宇宙に出た人間が言ったとされる言葉だ。一九六一年の春、史上初めて、宇宙への有人飛行が成功した。生まれて初めて俯瞰した母星の容姿は、彼が思っていたものとはきっと違って、青みがかったものだった。

その理由こそ、私たちにはとても身近な、『水』なのである。

約一ヶ月前、学校の理科室である実験をした。かべ際にある、蛇口をひねって驚いた。出てきたのは、絵の具をたくさんとかしたような、茶色く濁った水だったのだ。大雨の庄内川を彷彿とさせるそれは、「赤水」という水道管のさびが原因で起きるものだという。その時は、蛇口をひらいたままにしておけば、しばらくして透明な、『普通の水』が出てきた。しかし、このささいな出来事は私が水について考えるきっかけとなった。

水の循環するしくみについて、「雨が川を流れて海から雲に戻る」程度のことしかわかっていなかった私は、人為的に行われている『水をめぐらす』活動について調べて、「上下水道」の詳しい役割を知った。

ダムや川から水を取り、砂や石を除き、消毒などをして安心して飲めるものにする。そうしてできた『水』を私たちの家や学校へと『供給』するのが「上水道」。

そして、私たちが使ったり、工場で使用されたりした『排水』を運ぶのが「下水道」である。下水処理場できれいにされた水を、川などにかえすのも下水道の役割だ。ちなみに、日本の下水処理は世界でもトップクラスにレベルの高いものなんだそうだ。こういった水道がしっかりと整備されているおかげで私たちの『日常』があるのだと思うと、それをつくったり、動かしたりをしている人たちに、心の底から、感謝の気持ちが溢れてくる。

上下水道を通して行われる、下水処理などの人の手による浄水とは別に、『自然の力』によって起きる『浄水』がある。川や湖に住む微生物による「自浄」や森の土の中で水が「ろ過」される現象などがそうだ。特にこの『森の浄水』は、「緑のダム」といわれる森が水を貯める現象ともあわせて、日本に限らず美しい清流を生み出している。しかし、この自然の力にも限界があって、流れ出す排水が多くなれば川は自浄しきれないし、過度な森林伐採がされれば、土壌は壊されてろ過はうまく機能しない。『人』が自分たちの世界をうまくまわしていこうとやることによって、環境が崩れ、水のことを汚してしまうのだ。

しかしながら、人は傷つけられるばかりではない。人が自然災害の被害に遭うこともある。赤水の例えとして出した庄内川の氾濫などは、水の災害のわかりやすい例だろう。今から約二十五年前、平成十二年九月、前代未聞の豪雨により、木曽三川の一つ、庄内川が氾濫した。私が生まれるよりも十年近く前のことだが、鮮明に覚えているようで、祖母はときどき、その時の様子を、語ってくれる。「駅にもこんな、立つところすれすれに泥水が上がって、線路が全然見えなくって」と。人々はこのような経験から堤防やハザードマップなど様々な対抗策を立てている。が、それも通常化しつつある異常気象の被害を防ぎきるには至っていない。地球温暖化などの影響だ。

こうして水についてのことを調べると、水と人とは、良くも悪くも相互に大きく関係していることがわかった。そして、その関係を良くきれいに続かせていくのか、悪く汚して終わらせるのか。その関係の命運を握っているのは、私達人間の方であると私は思う。

「地球は青かった」―水の豊かなこの星のその美しさを表す言葉を、過去を惜しむ言葉にしないために、自分でできることを探しながら、まずは募金から始めてみようと思う。